

# 琉球大学学術リポジトリ

## セルジオ・レオーネ 『夕陽のガンマン』 研究ノート

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 公開日: 2009-07-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西森, 和広 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/11167">http://hdl.handle.net/20.500.12000/11167</a>

## セルジオ・レオーネ『夕陽のガンマン』研究ノート

西森 和広

初めに

セルジオ・レオーネ映画読解を目指す研究過程の報告として、今回は『夕陽のガンマン』*For a Few Dollars More* (1965年公開) をめぐる分析や資料等を紹介する。単独監督作品としては三作目、「ドル三部作」ものとしては『荒野の用心棒』に続く第二作となる本作は、その後のレオーネ作品を構成することになる様々な素材がふんだんに盛り込まれていて、レオーネ作品全体の特徴を把握する上でも重要な作品と言えよう。今回は作品の筋と構成、主要登場人物、後の作品で再利用される素材やテーマについての概説と、今後調査の対象となる資料も含めて主要参考文献を整理し提示しておきたい。

### I. 作品の筋と構成

オープニング・タイトルは血を思わせる真っ赤な画面が山並みを背後にいたたく赤茶けた台地の遠景のショットへと移り開始される。その台地を進む馬上の人物が見える。そこに鐘の鳴るような音、口笛、鼻歌、マッチを擦る音などがかぶる。やがて銃を構える音、一瞬の間から銃撃音と共に画面手前に硝煙が上がりると同時に、馬上の人物は崩れ落ち、馬は主を失って暴れまわる。前作『荒野の用心棒』のクリント・イーストウッド演じる流れ者を思い出させるこの場面の後、タイトル・クレジットとなる。その最後に「命に値打ちのない場所では、死が時にその代価をもたらした。こうして賞金稼ぎが登場した」という言葉が映し出され、本編に入る。本編は概ね以下のような各シークエンスに分けて見ることができる。

[シークエンス] :

- ①モーティマー大佐のトゥーカムカリへの到着とお尋ね者キャラウェイとの対決
- ②モンコのホワイト・ロックス入場とお尋ね者キャヴァノーとの対決

③インディオの脱獄と密告者への復讐 ④モンコのエル・パソ入場 ⑤インディオの寓話：エル・パソ銀行の金庫の秘密 ⑥エル・パソ銀行の下見と「ひと悶着」 ⑦モーティマーとモンコの「はでな」出会いと共闘の成立 ⑧モーティマーの計略：モンコ、インディオの仲間に加わる ⑨サンタ・クルス銀行襲撃四作戦の顛末 ⑩計略の失敗：エル・パソ銀行襲撃と金庫強奪 ⑪アグア・カリエンテへの逃亡 ⑫「ひと悶着」の決着とモーティマーの提案 ⑬モンコとモーティマーへのリンチ ⑭インディオの裏切りの計略 ⑮モーティマーとインディオの対決 ⑯モンコの後始末

幾分込み入った展開を見せる本作の以上の構成を単純に把握するのに、例えばソナタの形式を借りて次のようにまとめるのはどうだろうか。まず馬上の人物が銃撃されるオープニング・タイトル部分を序奏として、シークエンス①～③は三人の主役を紹介する主題呈示部（第一主題：モーティマー、第二主題：モンコ、第三主題：インディオ）、④～⑧はモンコとモーティマーの共同戦線の締結（第一・第二主題の対立と融和）及びインディオの盗賊団によるエル・パソ銀行襲撃計画（第二・第三主題の偽りの融合）とを描く展開部の前半、⑨～⑪は銀行襲撃の顛末と二人の共同作戦の失敗を描く転調の激しい展開部の後半、⑫～⑭は三人が各々再び「個・孤」（個人であり孤独であること）に立ち返るべく、独自の行動を展開し、終局を準備する主題の再現部、そして⑮・⑯は急転直下の終曲という構成である。

## II. 登場人物

主な登場人物の簡単な紹介をする。モーティマーだけは本名であろう。

ダグラス・モーティマー大佐（配役：リー・ヴァン・クリーフ）：元軍人だが今は賞金稼ぎである。銃身の長い射程距離の遠い銃を愛用する他、各種の銃を備えている。賞金の掛かったインディオのグループに対抗するため、モンコに共同戦線を張ることを提案する。しかし彼の本当の目的は最後に明かされる。

モンコ（クリント・イーストウッド）：『荒野の用心棒』の流れ者と同じ、葉巻にポンチョのスタイルで登場する。賞金稼ぎで、その稼業に極めてドライな態度で臨んでいる。内側から突き崩すというモーティマーの策略に従い、イ

ンディオの仲間に加わるため、インディオの友サンチョを脱獄させる。

エル・インディオ（ジャン・マリア・ヴォロンテ）：盗賊団のリーダー。密告により捕らえられていた牢獄を仲間の手により脱獄。牢獄で出会った大工からエル・パソ銀行の秘密を知り、銀行襲撃を図る。マリファナを常用する。女性の顔写真が嵌め込まれた懐中時計を所持する。開くとオルゴールが鳴り、その音色は彼を回想に向かわせる。そのオルゴールを鳴らし、音楽が止まるのを合図に撃ち合うという決闘スタイルを好む。最後には仲間を裏切る。

ニーノ（マリオ・ブレガ）：マリファナを吸って眠りに落ちたインディオに上着を掛けてやる場面などからその信頼関係が伺われる。インディオが多分裏切らなかつたであろう唯一の男。最後はグロッキーに刺されるので本当のところは分からないが、裏切りの片棒を担いで仲間の一人を殺し、モーティマーとモンコを逃がす。

ワイルド（クラウド・キンスキー）：名前の通り性格も顔付きも激しい「猫背」の男。エル・パソ銀行の下見を控えて、酒場で一服する彼の背中でマッチを擦ったモーティマーに怒りを爆発させようとするが、仲間に抑えられる。その後アグア・カリエンテで再会し両者は対決する。

グロッキー（ルイジ・ピスティリ）：インディオの仲間だが、信頼を寄せ合う関係ではない。その裏切りを見抜き、ニーノを殺す。金を奪ってインディオも殺すつもりだったが、モンコらが奪ったと分かり、仕方なくインディオと共にモンコらと対決する。

以上の他に、それぞれモーティマーとモンコに倒されるお尋ね者キャラウェイとキャヴァノー、インディオの仲間たち、密告した男とその妻と幼子（男の子役だがレオーネ自身の二番目の娘）、エル・パソの少年とホテルの女主人、線路沿いに住む「預言者」、そしてフラッシュバックの女と男、つまりモーティマーの妹と恋人、などが主な登場人物である。

### Ⅲ. レオーネのテーマ、その後の展開

本作に登場し、その後の作品で再び扱われことになる諸テーマ、事柄などを整理しておく。

- (1) まず「賞金稼ぎ」bounty-hunter（本作では bounty-killer と表現）という存在である。本作に続く「ドル三部作」最後の作品『続夕陽のガンマン』の同じイーストウッド演じる主人公はこの稼業をなりわいとしている。だがそこでのスタイルは本作の「オーソドックスな」ものとは異なり、通常の見方（賞金稼ぎがお尋ね者を連行して金を得るが、実は両者はグルであり、処刑される寸前に救出してはまた繰り返す）。このやり口はさらにその次回作となる、「昔々三部作」の第一作『ウエスタン』にも再出するが、そこではあくまでも一回限りのトリックとして描かれている。同じ作品中の主役や敵役が、詳細には語られない過去において賞金稼ぎと呼ばれる存在であった可能性はほのめかされるものの、もはやそれが稼業として成り立つ時代は終わりつつあることを感じさせる。
- (2) 次に鉄道に対する屈折した感情も本作で始めて描かれ後続の作品にも再現される。本作の冒頭で、モーティマー大佐は列車に乗って登場する。彼は通過予定の駅に降りるために平然と非常ロープを引いて緊急停車させ、自分の馬を貨車から引き出す。そして車掌に対しては腹に付けた銃を見せながら昂然とする。またエル・パソの「預言者」と呼ばれる老人は鉄道を憎み、土地を売って立ち退くことを拒絶し、敢えて線路の側に暮らし、轟音と振動をもともせず暮らしている。新しい時代の進歩に不可欠な鉄道の能力を認めつつも、古い何かが失われてゆくであろうことへの不快が、モーティマーらの振る舞いを一見アンビヴァレントなものに見せる。巻頭の場面にやはり列車の到着が描かれる『ウエスタン』では、鉄道への屈折したさまざまな感情が物語を突き動かす程重要な要素となる。そしてその後の『夕陽のギャングたち』や、最後の作品『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』では特にそうだが、列車もしくは駅という存在はむしろノスタルジーという感情の対象として扱われることになる。
- (3) 「徐々に明らかにするフラッシュバック」の使用は本作に始まる。インディオがマリファナを吸い、過去の記憶が甦る時、ある音色が聞こえてくる。それは懐中時計のオルゴールのものであり、時計の中には女性の写真が嵌め込

まれている。そしてそれは彼の回想の中に登場する女性である。インディオの記憶に刻み付けられた過去のドラマが彼を苛み、残酷さへと駆り立てるかのように、殺人を犯そうとする時、彼はいつも時計のオルゴールを鳴らし、そのメロディの消える時を待つのだ。ライトモチーフのように回想に際して同じ音楽が鳴り響くという手法は『ウエスタン』以降の「昔々三部作」での定番となる。そしてそれらの音楽を担当するのは常にエンニオ・モリコーネである。

- (4) また本場の西部劇ではタブー視されていたという麻薬の吸引描写も、『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』でのヌードルスの阿片吸引に再現される。おそらく『夕陽のギャングたち』におけるショーンのアルコール依存症を思わせるウィスキー飲酒の場面などもこれらと軌を一にするのではないか。麻薬やアルコールの力なしでは己を律しきれない我々の世界の現実をレオーネは描きたかったのか。
- (5) 子供の役扱いに前作とは異なる変化が生じる。前作での子役は母親と引き離された悲しい存在という役柄を割り振られただけであったし、主人公の活躍で家族の絆は取り戻され、ハッピーエンドとなる。これは従来の西部劇の約束事に適う結末であった。本作で子役は重要性を高める。エル・パソでモンコの使い走りや探偵役を務める少年が登場する一方、密告者の子として無残に殺害される幼児が描かれる。主人公の側で果敢な働きをする子役というのは西部劇では特に珍しくない。『シェーン』などでもお馴染みである。しかし子供が殺人の犠牲になることは、場面に描かれるか否かを問わず、従来の西部劇ではやはりタブーに近かったのではないか。これも当時の観客に与えたショックは大きかっただろう。フィリップ・オルトリの指摘どおり、レオーネの作品では子役は常に災難の対象となる。
- (6) 以後の作品の基調となる主要登場人物の関係を構築する「友情と裏切り」のテーマが始めて打ち出されるのも本作である。そしてここではとりわけ三という数字が鍵となっている。確かに前作においても対立する二つの悪党勢力とその間に入って攪乱する主役という三者の構図があったのだが、主人公の役目は二勢力間を行き来しながら破壊することを目指すいわば触媒のそれ

であった。その意味でどこからか現れ、どこかにまた去ってゆく流れ者という存在が相応しかった。だが本作では主役の側が内的な友情関係を基盤に共闘体制を講じるという図式が採用される。つまり悪役一に対し味方役二の構図となるわけだが、それが単純でないのは、共闘する二の側の結びつきが一時的で常に離間の可能性を孕んでいるという点にも特徴がある。この構図は本作から『夕陽のギャングたち』までの諸作において基本的に採られる構図となる。共闘する側の結びつきが最も弱くなり、ほとんど正三角形に近づくのが、つまり一対一対一の構図に限りなく近くなるのが『続夕陽のガンマン』ということになる。

- (7) 孤独な無法者同士の共闘関係を構築するための出会いは当然強烈なものになる。本作でのモーティマー大佐とモンコの出会いは、それを隠れて見物する子供たちの科白にもあるように子供の喧嘩のようだ。互いに相手のブーツを踏みつけると、モンコは大佐を殴る。落ちた帽子を拾おうとする大佐が手を伸ばし掛けると銃で撃っては遠ざける。これを数度繰り返すともはやモンコの銃の射程を超える。そこでゆっくり帽子を拾った大佐は射程距離の長い銃を使って、モンコの帽子を吹き飛ばす。落ちて来そうになる度に何度も撃っては中空に飛ばす。やがて友情を結ぶ二人の人物が出会う時に子供の喧嘩のような意地の張り合いをする。西部劇に限らず、男気を描くような映画ではよく見る設定ではある。そしてそれはレオーネのお気に入りでもある。『夕陽のギャングたち』のショーンとフアンの出会いなどはその完全な再現だし、やや大人しくはなるが『ウエスタン』でも踏襲されるといえる。
- (8) インディオがエル・パソ銀行の金庫の秘密を仲間話す時、「俺の言うことを分かり易くするために、よくできた短い寓話を話そう」と始める。キリストが十二人の使徒に向かって話すように、と評される場面だが、その後「昔一人の大工がおりました」と続ける。この「寓話」という言葉は、自作が「大人のための寓話」となることをレオーネが望んでいたことを考えれば、意図された科白であると推測されるし、さらにまたその寓話を始める言葉、「昔々」が後の三つの作品でタイトルに用いられ、それらの作品を三部作として認知させる象徴的な言い回しとなる事実とも併せて、重要な科白と

して記憶されるべきであろう。

- (9) これは前作にすでに予兆があったが、女性に対する扱いの冷淡さ、さらには冷酷さという点も挙げておこう。レオーネは西部劇で女は不要くらいに考えていた。それで女性役の出番は少ないし、出てきても大概是乱暴されたり、殺されたりである。本作でもすぐに殺される密告者の妻、バスタブでおびえる娼婦、ホテルの少し色気のある女主人、科白のある役は以上で登場時間が一分を超えるのは女主人だけである。もう一人回想中に出てくる大佐の妹は物語の上では重要な役だが、科白はなく、登場時間も短い。以後のレオーネ作品でもこの傾向は強い。『ウエスタン』のジルと『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』のデボラぐらいが例外であろうか。

他にも幾つもの細かな事柄がある。例えばインディオからモーティマーに向けられた「お前は誰だ？」という問いは何気ないものであったが、『ウエスタン』でフランクがハーモニカに向けた同じ問いはフランクの苛立ちを募らせ緊張感を高める言辞と変わる。また娼婦の入浴場面もやはり『ウエスタン』にかなり意味深い場面となって再現される。インディオとモーティマーの決闘の場に選ばれた農家の囲い込み地が円形闘技場を思わせるが、これもまた『続夕陽のガンマン』、『ウエスタン』の両作で再現される。牢獄で夜を過ごすインディオの友サンチョのひげ面の顔を這う蠅は『ウエスタン』のキャトル・コーナー駅でハーモニカを待つ殺し屋のひげ面の顔をしつこく這い回る蠅となって戻って来る、などなど。科白、小道具、背景等、本作を種としてその後に再利用され、展開されるものはこの他にもまだまだあるだろう。

#### IV. 参考資料について

最後に主な参考資料を分類し、覚書を付す。

##### (1) 映像資料

『夕陽のギャングたち』(DVD英語版) :20世紀フォックス・ホームエンターテイメント・ジャパンGXBA-16170

今回参照できたこの版はオリジナル英語版であるが、公開に際してカットされた箇所は復元されていない。当該箇所を復刻した版もできれば参照



したい。

．．．

- (2) レオーネとその作品を対象とするか、主たる対象とした著作

Christopher Frayling: *Spaghetti Westerns – Cowboys and Europeans from Karl May to Sergio Leone*, new edition, London, I.B.Tauris, 2006. (1<sup>st</sup> edition: 1981)

—: *Something to do with Death*, London, Faber & Faber, 2000.  
(クリストファー・フレイリング: 『セルジオ・レオーネ』、鬼塚大輔訳、東京、フィルムアート社、2002年)

—: *Once Upon a Time in Italy, the Westerns of Sergio Leone*, New York, Harry N. Abrams, 2005.

フレイリングによる重要なレオーネ研究三部作。第一作はカール・マイに始まるヨーロッパ製西部劇の歩みを展望するものだが、『夕陽のガンマン』も含めたレオーネの西部劇諸作品についての分析が眼目となっている。まさしくレオーネ・ルネッサンスを告げる著作。二作目は伝記的研究で、各作品の成立過程を詳細に追いながら、様々な裏話まで拾い集めた貴重な研究。最後のものは、さらに詳細な研究成果や証言が追加され、また貴重な写真資料を多く伴う。フレイリングのこれらの著作なくして今後のレオーネ研究は成り立たないが、果たしてこれに何が付け加えられるだろうか。

Oreste De Fornari : *Sergio Leone*, Milan, Moizzi, 1977.

フレイリングにも度々引かれる貴重な初期研究の一つだが未見である。

Gilles Cèbe : *Sergio Leone*, Paris, Henri Veyrier, 1984.

比較的初期のフランス語による著作。豊富な写真資料と共に、あまり取り挙げられないレオーネの初監督作『ロード島の要塞』の内容紹介等を含む。

Robert C. Cumbow: *Once Upon a Time – the Films of Sergio Leone*, Lanham (MD), Scarecrow Press, 1987.

レオーネ芸術へのアメリカ側からの返礼として貴重な著作。各作品への詳細な分析と幾つかのテーマについての考察を行う。

Noël Simsolo : *Conversations avec Sergio Leone*, Paris, Cahiers

du Cinéma, 1999. (édition originale: Paris, Stock, 1987)

フランスの映画研究者によるレオーネへのインタビュー集。作品理解に関わると思われる幼年期から現在に至るまでの様々な事項について貴重な証言を引き出す。

Philippe Ortoli : *Sergio Leone – Une Amérique de légendes*, Paris, l'Hartmann, 1994.

子供の殺戮という視点からの読みが興味深い。

Carlos Agilar: *Sergio Leone*, Madrid, Catedra, 1999.

スペインの研究者による著作。

．．．

(3) レオーネとその作品を部分的な対象とした著作

Jim Kitses: *Horizons West – Directing the Westerns from John Ford to Clint Eastwood*, new edition, London, British Film Institute, 2004. (1<sup>st</sup> edition: 1969)

表題通り六名の西部劇監督を主たる対象として論じる著作。唯一のイタリア人監督、レオーネにも一章が割かれている。

Gian Lhassa avec la collaboration de Michel Lequeux: *Seul au monde dans le western italien*, 3 vols, Mariembourg, Grand Angle, 1983.

イタリア西部劇に関する網羅的な研究と貴重な資料集。レオーネとその作品、登場人物と俳優たちについての記述も豊富に含む。

Thomas Weisser: *Spaghetti Westerns – the Good, the Bad, and the Violent*, Jefferson (NC), McFarland, 1992.

イタリアを主にヨーロッパ制作の西部劇を対象とする作品事典。スタッフ、俳優についても詳細な資料を付している。

Marcia Landy: *Italian Film*, Cambridge, Cambridge University Press, 2000.

イタリア映画全般を扱うが、イタリア西部劇にも一章を設けており、かつレオーネ作品に多くの記述が割かれている。

Howard Hughes: *Once Upon a Time in the Italian West*, London, I.B.Tauris, 2004.

イタリア西部劇から代表作を選び、論ずる。レオーネは「ドル三部作」の全てが採り上げられている。

梶原和男：『マカロニウエスタンのすべて—イタリア西部劇324』、東京、白亜書房、2002年

イタリア西部劇に他のヨーロッパ物も若干含めての概説書。

．．．

(4) レオーネと関係の深い人物に関する著作

Peter Bogdanovich: *John Ford*, Berkeley, University of California Press, 1978.

自身映画監督である著者の敬愛する巨匠へのインタビューを中心にした評伝。フォードのレオーネへの影響は言うまでもないが、著者自身もレオーネとの間に因縁を持つ。

Robert E. Kapsis and Kathie Coblentz (ed.): *Clint Eastwood, Interviews*, Jackson (MS), University Press of Mississippi, 1999.

Noël Simsolo : *Clint Eastwood – Un passeur à Hollywood*, Paris, Cahiers du Cinéma, 2003.

レオーネの名を常に思い起こさせてくれる俳優・監督に関する著作。前者はインタビュー集、後者はレオーネと親しかった著者による評伝。

リンゼイ・アンダーソン：『ジョン・フォードを読む』、高橋千尋訳、東京、フィルムアート社、1984年（原著：1981年）

全作品の研究と評伝。

．．．

(5) 西部劇全般を扱う著作

Henryk Hoffmann: *Western Film Highlights – The Best of the West, 1914-2001*, Jefferson (NC), McFarland, 2003.

年毎の作品傾向と優秀作品、異色作等に言及する。スタッフ、俳優、原作等に関する資料も含む。レオーネ作品にも言及。

Homer B. Pettey (ed.): *The Western (Paradoxa, no.19)*, Vashon Island (WA), Paradoxa, 2004.

西部劇論文集。豊富なフィルモグラフィーはテレビシリーズ物も収録する。

Gabriele Lucci (ed.) : *Le Western*, traduit de l'italien par Dominique Férault, Paris, Hazan, 2006. (édition originale: Milano, 2005)

イタリア編纂の西部劇事典のフランス語版。キーワード、俳優・監督、作品の各項立ての概説でレオーネと彼の作品の項目もある。

G.N.フェニン、W.K.エヴァソン：『西部劇—サイレントから70年代まで』、高橋千尋訳、東京、研究社出版、1977年（原著：1962、1977年）

西部劇の歴史を概観できる好著。イタリア物に対してできるだけ公正な態度を取ろうとするがどうしても好きになれないという感じが逆に好ましい。

逢坂剛、川本三郎：『大いなる西部劇』、東京、新書館、2001年

西部劇を愛する小説家と評論家のアメリカ西部劇の黄金時代の作品を専ら対象にした対談集。時代の気分がよく分かる。

芦原伸：『西部劇を読む事典』、東京、NHK出版、2003年

代表作品の紹介と共に、西部劇の時代背景を、武器の変遷、当時の暮らしなども含めてコンパクトに紹介する。

...

(6) 映画全般を対象とする著作

André Bazin : *Qu'est-ce que le cinéma*, Paris, Le Cerf, 2002. (1<sup>ère</sup> édition :1975)

「カイエ・デュ・シネマ」誌の創始者バザンの死後の編纂になる評論集。西部劇再評価の基でもある。

Edgar Morin : *Le cinéma ou l'homme imaginaire*, Paris, Minuit, 1978.

Gilles Deleuze : *Cinéma 1 – L'image-mouvement*, Paris, Minuit,

1983.

— : *Cinéma 2 – L'image-temps*, Paris, Minit, 1985.

人類学と哲学の大家二人による論著は、映画とは何かというバザンへの問いへの二様の答えの試みと言ってしまえばそれまでだろうか。映画の人類学を試みるモラン、映像と運動・時間の関係に食い入るドゥルーズ、難解ではある。後者はフラッシュバックにも論及する。

David A. Cook: *A History of Narrative Film*, 4<sup>th</sup> edition, New York, Norton, 2004. (1<sup>st</sup> edition: 1981)

Tom Pendergast and Sara Pendergast (ed.): *International Dictionary of Films and Filmmakers*, 4 vol., 4<sup>th</sup> edition, Detroit, St. James Press, 2000.

以上は世界の映画を対象にした歴史書と事典。前者は西部劇と時代劇の相關にも触れる。

Vincent Pinel : *Ecoles, genres et mouvements au cinéma*, Paris, Larousse, 2000.

映画の流派、動向、ジャンルについての事典。

ルイス・ジアネッティ：『映画技法のリテラシー』全2巻、堤和子他訳、東京、フィルムアート社、2003-4年（原著：1972年）

ジェイムズ・モナコ：『映画の教科書—どのように映画を読むか』、岩本憲児他訳、東京、フィルムアート社、1993年（原著：1977年）

スティーヴ・ブランドフォード、バリー・キース・グラント、ジム・ヒリアー：『フィルム・スタディーズ事典』、杉野健太郎他訳、東京、フィルムアート社、2004年（原著：2000年）

以上三点は技術面からの理解などにも有用である。

ユセフ・イシャグプール：『ル・シネマー映画の歴史と理論』、三好信子訳、東京、新曜社、2002年（原著：1996年）

現在活躍する映画の「エッセイスト」による簡潔で刺激的な映画論の一つ。

．．．

(7) アメリカ西部の歴史に関する著作

Eugene Cunningham: *Triggernometry – A Gallery of Gunfighters*, Norman, University of Oklahoma Press, 1996. (Original edition: 1934)

ジョン・ウェスリー・ハーディング、ピリー・ザ・キッドなど西部の「伝説」のガンマンたちの小伝集。

Susan Armitage and Elizabeth Jameson (ed.): *The Women's West*, University of Oklahoma, 1987.

西部開拓史における女性の地位や位置について知ることができる。

Edward S. Curtis: *The North American Indian*, Köln, Taschen, 2005. (Original editions: 1907-30)

19世紀末から20世紀初頭の北米先住民の姿を写真に留めた原著の復刻版。レオーネなども当然これらを参照しただろう。

Leon Claire Metz: *The Encyclopedia of Lawmen, Outlaws, and Gunfighters*, New York, Checkmark Books, 2003.

西部に実在した保安官やアウトローたちの事典。

F.J.ターナー：『アメリカ史における辺境』、松本政治・嶋忠正訳、東京、北星堂書店、1973年（原著：1920年）

アメリカ史における西部開拓の重要性を説いた古典的著作とされる。

猿谷要：『西部開拓史』、東京、岩波書店、1982年

岡田泰男：『アメリカの夢、アウトローの荒野—ジェシー・ジェイムズの西部』、東京、平凡社、1988年

鶴谷壽：『カウボーイの米国史』、東京、朝日新聞社、1989年

加山昭：『アメリカ鉄道創世記』、東京、山海堂、1998年

篠田靖子：『アメリカ西部の女性史』、東京、明石書店、1999年

以上、日本人研究者による有用な著作。

他に『夕陽のガンマン』制作に影響を与えたと考えられる次の著作及び作品は是非参照したい。マーク・トゥエインの『ラフィング・イット』*Roughing It* (1872)、ロバート・アルドリッチ監督の『ベラ・クルス』

*Vera Cruz* (1954)、アンソニー・マン監督の『裸の拍車』*Naked Spur* (1952) と『胸に輝く星』*The Tin Star* (1957)、そしてアンドレ・ド・トス監督の『賞金を追う男』*The Bounty Hunter* (1954) などである。

終わりに

レオーネは本作で初めて「徐々に明らかにするフラッシュバック」の手法を用いた。加えて記憶の呼び覚ましを促す小道具に懐中時計を用いたことで、記憶との葛藤、つまり「時との戦い」というテーマの印象を強烈に刻みつけた。この「時との戦い」というテーマは、以後レオーネ作品の基調となってゆく。その意味でも本作の重要性が再認識されるだろう。